

## 朽ち葉の揺り籠

1mm

君にこの声は届かない。  
遮られたまま、触れられないまま。

\*

誰もが、「水晶」と呼んでいた。

水晶。——水晶に映るモノ。謂わば、彼女は、監視対象というモノだった。

彼女の朝は早い。朝日が顔を出すほんの少し前に、目を開ける。

寝起きはよく、ベッドの上で半身だけを起こし、そうしてただじっと、空が明るくなりきるのを眺めている。光を瞳にきらきらと。

そうして、部屋の中が明るくなった頃。ゆっくりと顔を此方に向け、瞬きもせず、いち、に、さん、秒数えて。

身体ごと向き直り正座、此方に深く頭を下げる。

しばらく後、彼女は身体を起こし、ちらとだけ此方に視線を流して。

その後は、もう此方を気にせず日常に入るのだった。

\*

\*

雨降る窓辺に寄り添い、長いこと眺め続けていた。

その内うたた寝に移っていたが、その表情は穏やかで、おそらく雨が好きなのだろうと思った。

\*

本を読んでいた。ベッドに寝転がり、ひたすらに。

食事にもあまりに取らないものだから、思わず端末を短く鳴らした。

色が変わっている窓の外に、苦笑していた。よくあることだったのかもしれない。

\*

編み物をしていた。慣れているのだろう、魔法みたいに、ふわふわもこもことあつと言う間に形が出来ていく。少し大きめのミトンの手袋、

紺色で落ち着いた見た目の。

作ってしまった後は、机の引き出しに仕舞っていた。  
(その後、使おうとする様子もなかった。)

\*

\*

\*

\*

穏やかな日々が、ただただ過ぎていく。 春のような。

そう、勘違いをしていた。自分だけが。

\*

しあわせな勘違いを、していた。

\*

\*

半年も経たなかった。

そうして、彼女の最期のことを知る。低い空は、灰色。  
音も無く初雪が降りる。

\*

\*

彼女の朝は早い。朝日が顔を出すほんの少し前に、目を開ける。  
(きっと、よく眠れていなかったのだ。分からぬ明日の運命に恐れて、)

寝起きはよく、ベッドの上で半身だけを起こし、そうしてただじっと、  
空が明るくなりきるのを眺めている。光を瞳にきらきらと。  
(万華鏡のように波打って美しかったのは、そう、涙を湛えていたのだ、  
今更気付くなど、)

そうして、部屋の中が明るくなった頃。  
ゆっくりと顔を此方に向け、瞬きもせず、いち、に、さん、秒数えて。  
(瞬いたら零れるからだ、揺れる光が。)  
身体ごと向き直り正座、此方に深く頭を下げる。  
(分かっていたのだ。彼女は、——自分がこうなることを、始めから。)

しばらく後、彼女は身体を起こし、ちらとだけ此方に視線を流して。

その後は、もう此方を気にせず日常に入るのだった。

(でも。今日は、)

端末はもう鳴らせない。必要ない通信機にはロックがかけられている。

\*\*\*\*。エラー。

\*\*\*\*。エラー。

\*\*\*\*。エラー。

ふいに、此方の音が聞こえているはずもない彼女が此方を見上げた。

じっと見て、部屋の中にゆっくり視線を移して、またじっと見て。

「

聞こえない。彼女の声も。

「どうして」

届かない。この声も。

\*

\*

彼女の為に降った雪は、地に積もることなく、彼女と共に気化していく。

本当の春も、もう、来ない。

\*

(1, 237字)